

記念号に寄せて

大学と生涯学習教育

浦和大学・浦和大学短期大学部学長

八 木 浩 輔*

わが国の人口構成は、未だかつて人類が経験したことの無い速さで高齢化しつつある。そして日本人の平均寿命は、男女共に世界一で、79歳と86歳となった。所謂“団塊の世代”が定年退職し、健康で余暇・余裕のある高齢者がますます増加し、生涯学習のニーズが高まっている。他方、複雑多様化・国際化する現代社会での一層の活躍を目指す人々が、体系的学習を大学でもう一度と、リカレント教育としての生涯学習に参加する。21世紀の大学は、これら両面の社会人教育の場として貢献すべきである。

確かに市民大学講座は花盛りで、公民館、カルチャーセンター等で、パソコン教室、英会話、ヨーガ教室、俳句教室等々、硬軟・大小さまざまである。私も筑波大学在職中、県教育委員会の依頼で、「原子力の基礎とエネルギー問題」40時間・20週、次年度に「エネルギーの話」20時間・10週の市民大学講座を開講したことがある。受講者の年齢、職業は実に多種多様（含む高校生）、そして驚くほど熱心であった。この時の爽やかな印象が、その後、私の公開講座推進の背景にある。

ところで、大学が提供する市民大学・生涯学習講座は、上記の公民館、カルチャーセンター、或いは教育委員会提供の市民大学とは、一線を画す特色を持って欲しい。大学は何よりも学生教育の場である。従って私は、社会人受講者が学生を活性化し、同時に学生の存在が、前者を刺激する相互作用の場となるような市民大学講座を望む。

先般、浦和大学・同短期大学部が、“21世紀に生きる知恵と生きがい求めて”を共通のキーワードに、「パソコンABC」、「英会話中級」等を含む約10講座の『浦和大学オープンカレッジ』を開設した。私は、1,2年生向け正規授業科目「物理学」（半年間2単位）を社会人同時公開講座にして参画し、社会人31名（平均年齢53歳、男性13名、女性18名）と学生35名の合同クラスを開講した。その内容、実践記録、アンケート結果、成果等については、雑誌「大学の物理教育」に詳しく紹介したので^[1]、ここでは、社会人と学生の相互活性化について述べ、本学の今後の公開講座に資したい。

現代物理学の相対性理論、原子力、光量子等の講義中、物理学者アインシュタインが米国雑誌TIME「その世紀の人 Person of the Century」特集で、原子力・原子爆弾、ビッグバン宇宙、量子物理・エレクトロニックスの時代故に、ルーズベルト米大統領、インド独立の父のガンディーを抜いて20世紀を代表する一番の人物に選ばれ、TIMEの表紙を飾ったと話すと、社会人が、「科学者は、発見・発明という創造的活動を、それが将来人類に与える不幸まで考慮して行えるか・行うべきか？」という永遠の大問題を質問した。私見を述べ教

室全体で討論した。学期末の〈感想文〉に学生達の様々な意見表明があり、社会人のこの「引き金」は大変有効であった。

宇宙と人間のテーマの講義で、ワトソン・クリックによるDNAの二重らせん構造の発見が分子生物学を生み、それにはX線回折と言う物理的手段が決定的役割を果たしたと説明し、R. フランクリンによる見事な二重らせん回折像を見せた（彼女の不幸な夭折のエピソードも添えて）。1953年以降、生物学の教科書は新しく塗り替えられたと話すと、社会人が「私達の高校生物教科書には、全くその記載は無かった」と。それを受けて学生が「私達の教科書は、DNAの二重らせん構造からスタートした」と説明、図らずも遺伝子科学の急進展を実感することになった。この議論から、学生・社会人共に、最近のヒトゲノム解読、遺伝子治療、クローン問題等々を生みつつ急展開する遺伝子科学・工学のルーツを理解した。

社会人の「X線回折、分子レベルの構造が生物学に登場するのだから、高校理科教育での生物学、物理学、化学という教科分類は不自然で、学生の興味を殺ぐのではないか」という発言は、学生に良い刺激を与えた。〈感想文〉に「この視点から高校で物理や生物等を学べたら良かった。物理を好きになったかも」と書いた学生がいた。

学生A君は、社会人B氏にスクールバスで声をかけられた。A君がまだ1時限早いのにと訝ると、B氏は孫のようなA君にこう言った「90分間図書館で「物理学」の復習・予習をします」。A君は驚き、自分も少し復習をするようになった〈感想文〉。

社会人の授業中の真剣な態度に気圧されたか、学生達の私語が殆ど無くなり、居眠り学生は皆無になる。社会人の活発な質問に啓発され、学生達が質問するようになった。社会人は礼儀正しい：私が授業終了後、白板を拭き始めると跳び出してきて「私達がやります」。学生達は、初めポカンと見ていたが、後半から協力するようになった。

社会人女性の以下の〈感想文〉は、大学人への教訓である：「オープンカレッジ参加者の年齢層の多彩さに感動した。日本では、社会人に向けての知的好奇心を満足させる機能が乏しい。大学は、率先していろいろな分野の専門家達を募って、蓄積された知識を人々に惜しみなく与える場になって欲しい。あまりにももったいない人的資源が、埋もれている」。

浦和大学は、本年度「こども学部」を開学し、100名の1年次学生を誕生させた。同学部は、広く地域社会のこども・親及び祖父母との連携を基盤に、大学教育を展開することを目指している。この理念を実践する場として、「こどもコミュニティセンター」を開設した。さらに、地域及び埼玉県の生涯学習ニーズに応えるべく、本年後期学期からリカレント講座「こどもと育つ ― 子育て・孫育て ―」を開講する。『孫育て』のタイトルは、冒頭に触れた“団塊の世代”の参加を期待しているからである。

* 浦和大学ウェブページの教員紹介、更に「先生のページ」参照

注

- [1] 八木浩輔「講義『物理学』を社会人に同時公開して」、大学の物理教育2000-1（2000）pp.45-48、日本物理学会